

2020.12.26 関東社会学会研究例会「理論というフィールド＝ワーク」

シュツツ現象学はいかなる意味で 「社会学理論」なのか？

高艸 賢*

TAKAKUSA Ken

* 日本学術振興会特別研究員PD／慶應義塾大学訪問研究員

「理論」の意味を問う

- 「一般に理論とは、仮説と検証の反復によって抽出される体系的かつ斉一的な命題と理解されている。
（…）しかし実際の理論形成の現場では、概念やその体系としての理論命題それ自体によって、新たな事実そのものが生産＝発見されている。（…）本部会では、こうした社会学的理論研究のあり方を『理論というフィールド＝ワーク』という表現で明確化することにより、社会学理論を経験世界の『抽象化』とみる通俗的な見方を清算し、理論が社会学的認識だけでなく、対象そのものを生産する現場に立ち会うことをめざす」（研究例会趣旨文より）

→社会学者が「理論」という言葉で指しているものの多様性を受け止め、明示化する努力（cf. Abend 2008）

問い

アルフレート・シュッツの現象学は、いかなる意味で「社会学理論」なのか？

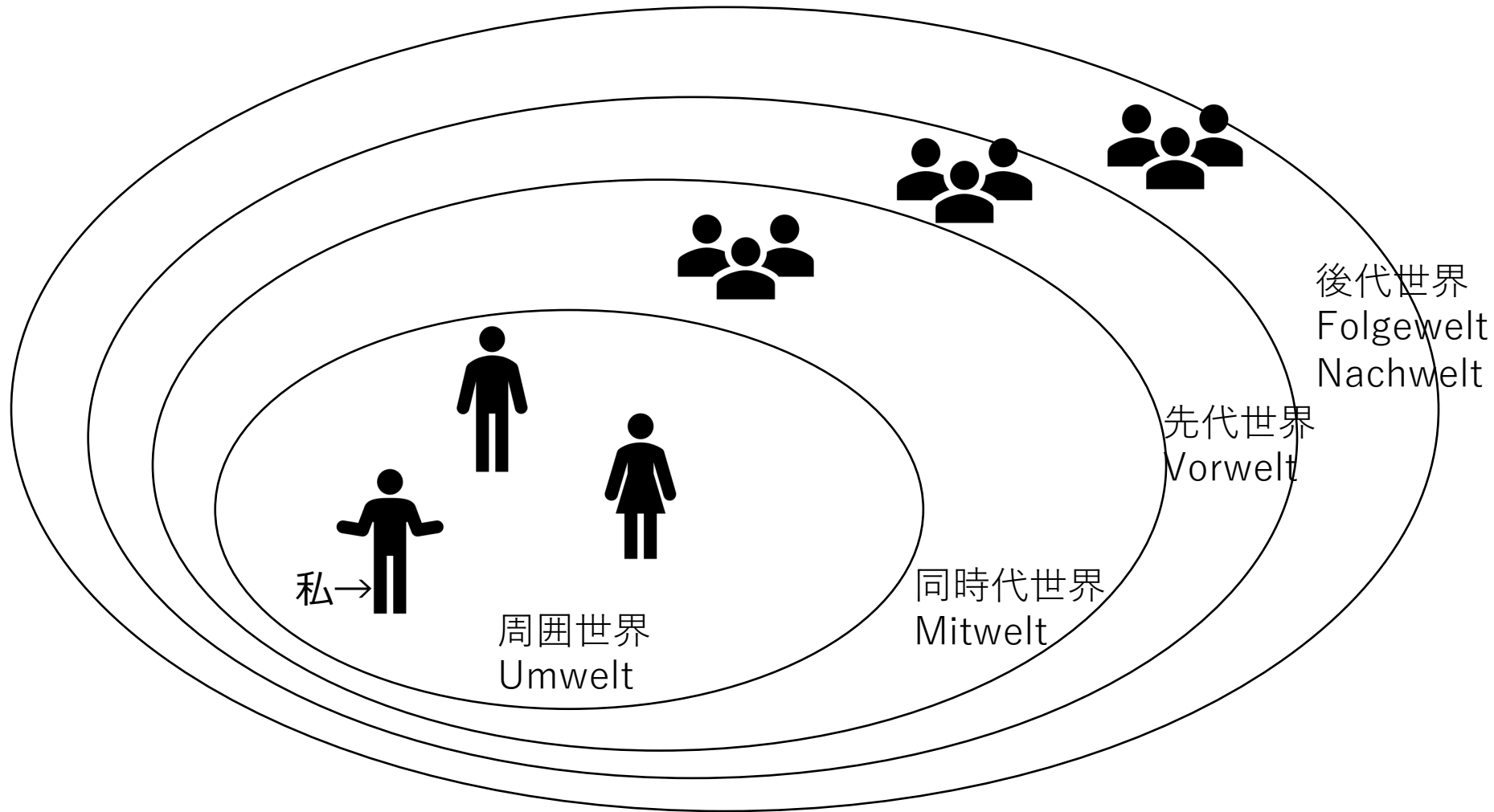
- シュッツの理論は「理論仮説」ではないし「解釈枠組み」でもない
 - × 調査を通じて妥当性を吟味されるような経験的命題
 - × 社会現象の特定の側面を浮かび上がらせるための装置、「めがね」
 - △ 未知の事実、あらたな実定性の発見を可能にするもの、対象を構成する概念
 - 「プロトソシオロジー」、つまり社会学の前提構造の探究

自然的態度の構成的現象学

- 自然的態度の人間の経験構造の記述
 - 空間的分節化
 - 時間的分節化
 - 社会的分節化
 - 自然的態度のエポケー
 - レリヴァンスの等高線
 - etc.
- →日常生活世界を「発見」したというより自明性による埋没から救い出した(?)
 - 経験がいかんにして組織化されているかを問う方法としての現象学（→エスノメソドロジー）

社会的世界の構造的分節化

(『社会的世界の意味構成』第4章、図は報告者作成)



パーソンズの苦言

- 「立場が異なれば、理論の実際の論理構造やその経験的利用はどのような影響を受けるのかについて、あなたはなにも示すことができないでいます」
- 「私としては、たんに抽象的な一般概念で理論や方法論の考察を行わずに、むしろつねに経験的な現象の解釈やその現象の一般化という特殊な限定された問題と関連させて、これを扱ってきたという点を、自分の書物のおそらくもっとも重要な、たった一つの長所であるとみなしています」
- 「あなたの作品を読んでいますと、いわれてみればまったくそのとおりに聞こえる主張を再三なさっていますが、いつも『それでどうなるのだろうか』という質問を私としてはしてみたくありません」

(Schutz and Parsons 1978: 67=2009: 124)

基層理論

- 基層理論 : 社会の根源の哲学的解明 (→意味、行為、理解 etc.)
- 中範囲理論 : 社会現象の経験的解明、検証可能な命題の束
- 理念理論 : あるべき社会の構想、規範的理論

(西原 2010、河野 2012を参照。ただし報告者による一部改変あり)

- 「社会学理論」は社会の根源の哲学的解明を目指す学というだけでなく、「科学としての社会学の理論」でもある
 - 基層理論としての社会学理論は、(科学としての社会学の基礎概念の明確化に取り組んでいるとはいえ、) 社会の根源の哲学的解明にウェイトが置かれている
 - シュッツの理論が「社会学理論」として持つ含意を十分に引き出すには、後者にも光を当てねばならない
 - cf. 哲学における社会性や共同行為への注目 (木村 2018)

認識論 (Erkenntnistheorie) とは*

= (科学的) 認識についての理論

= 科学論 (Wissenschaftslehre)

- Wissenschaftslehreに対応する語が英語にないので、シュッツは英語だとmethodology (and epistemology) と呼んでいる
- 社会科学の哲学的基礎づけ

* 以下の内容は高艸 (2020) に基づいている。シュッツに関する先行研究の詳細な検討はそこで行ったので、本報告では最小限にとどめる。

社会科学認識論の問題設定

- 基本問題：「社会科学が知を生み出すことはいかにして可能か」「社会科学的認識はいかにして可能か」
- 基本前提：社会科学者にとって、社会的世界は研究対象であると同時に自らが属する世界でもある
 - Luckmann (1983=1989)：認識論的再帰性 (epistemological reflexivity)



- 前科学的な生の次元から出発し、生の一様態としての (社会) 科学を解明していく
- 研究対象としての生世界ではなく、学的反省の入り口としての生世界 (Lebenswelt)

「社会科学の基礎づけ」とは何か？

- シュッツは社会科学認識論のことを「社会科学の哲学的基礎づけ」と呼んでいる
- シュッツの標榜する「社会科学の哲学的基礎づけ」を、「科学的構成物の究極的な妥当性の根拠」（山口 1981: 40）の探求として解釈する立場が存在する
- あるいは個別の学派（オーストリア学派経済学）の方法論的正当化として解釈する立場（橋本 1995）

「社会科学の基礎づけ」とは何か？

- シュッツ自身の立場

- 「私の確信するところでは、社会学者が何をせねばならないかを指示するのは方法論者の仕事ではありませんし、方法論者はそうする権限も持っていません。方法論者がやらねばならないことは、謙虚に社会学者から学び、社会学者が行っていることを社会学者のために解釈してあげることです」 (Schutz 1996: 146)
- (ウェーバーの基礎概念を精査する作業について：)
「社会諸科学の根本的主題と社会諸科学に特有な方法を明らかにしようと思うならば、これは避けられない。これまで十分に分析されてこなかった社会的存在の原現象のそうした解明だけが、社会科学の方法の正確な把握 (die präzise Erfassung der sozialwissenschaftlichen Verfahrensweisen) を保証する」 (Schütz 1932: III=2006: 8)

前期シュッツと後期シュッツ

- 1927年頃 「生の形式と意味構造」 (ASW Iに収録)
 - 1932年 『社会的世界の意味構成』 (*Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*)
-
- 1936-37年 「社会的世界における人格性の問題」 (草稿 ASW V.1に収録)
 - 1940年 「現象学と社会科学」 (CP Iに収録)
 - 1940-41年 『シュッツ=パーソンズ往復書簡』 (死後に刊行)
 - 1945年 「多元的現実について」 (CP Iに収録)
 - 1947-51年 『レリヴァンス問題の省察』 (草稿 死後に刊行)
 - 1953年 「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」 (CP Iに収録)
 - 1955年 「シンボル・現実・社会」 (CP Iに収録)
 - 1957年 「フッサールにおける超越論的間主観性の問題」 (CP IIIに収録)
 - 遺稿 『生世界の構造』 (ルックマンが編集して死後に刊行)

- 前期シュツツ

- ベルクソンの「持続」概念の強い影響
- 「生成 vs 生成し去ったもの」の対立図式
- 意味構成論の理論的出発点としての「体験の流れ」

- 後期シュツツ

- 生世界概念の導入、世界への内属 (cf. メルロ=ポ
ンティ)
- 所与としての間主観性
- プラグマティズムの影響
- 日常知の構造への注目

体験の流れからの疎隔としての社会科学 (Schütz 1932=2006)

- 不断の生成としての体験の流れ = 持続 (←ベルクソン)
- 持続の同時性における他者理解
- 生成し去ったもの = 客観的意味 → 概念 (= 科学)
↓
- 行為者が内的持続の流れの中で一步一步構成し構築している有意味的体験について、科学者はそこから体験の流れを取り去り、所与の知識や枠組みにあてはめる
- 「科学は常に客観的意味連関であり、社会的世界についてのすべての科学の主題は、主観的意味連関一般ないしは特定の主観的意味連関についての客観的意味連関を構成することにあるのである」 (Schütz 1932: 255=2006: 335)

第2章 各自の持続における有意味的体験の構成

第7節 内的持続現象—過去把持と再生

第8節 フッサールの「意味付与的意識体験」と行動の概念

第9節 行為の概念—企図と未来予持

第10節 「意識的」行為と明証性

第11節 恣意的行為と選択の問題

第12節 要約—第一の根源的意味概念

第13節 第一の意味概念の拡大

第14節 第一の意味概念の拡大（続き）

第15節 経験世界の構築と図式によるその秩序付け

第16節 解釈図式としての経験の図式—自己解釈と解釈、問題と
関心

第17節 意味連関としての動機連関

第18節 意味連関としての動機連関（続き）

第3章 他者理解理論の根本特徴

第19節 自然的見方における他我の一般定立

第20節 他者の体験流と私自身の体験流の同時性（続き）

第21節 他者理解という日常概念の曖昧さ—自己解釈作用による
他者理解の根拠づけ

第22節 固有の他者理解への転換

第23節 表現動作と表現行為

第24節 記号と記号体系

第25節 意味措定と意味解釈

第26節 表明の意味連関.要約

第27節 主観的意味と客観的意味：産出物と証拠

第28節 精神諸科学における主観的意味と客観的意味の理論の若
干の応用に関する補説

第4章 社会的世界の構造分析：社会的直接世界・同時代世界・先代 世界

第29節 さらになる問題提起の予備的展望

第30節 ヴェーバーの「社会的行為」の概念—他者態度と他者影
響

第31節 ヴェーバーの「社会関係」の概念—態度関係と影響関係

第32節 影響関係の動機連関

第33節 社会的直接世界と我々関係

第34節 直接世界の社会関係の分析

第35節 直接世界の観察

第36節 社会的同時代世界の問題への移行

第37節 理念型としての同時代世界における他我—彼ら関係

第38節 同時代世界の匿名性と理念型の内容充実性

第39節 同時代世界の匿名性と理念型の内容充実性

第40節 同時代世界の社会関係と同時代世界の観察

第41節 社会的世界における過去の問題

第5章 理解社会学の若干の根本問題

第42節 これまでの研究結果の回顧

第43節 同時代世界の観察と社会科学の問題

第44節 ヴェーバー社会学における理念型の機能

第45節 因果適合性

第46節 意味適合性

第47節 客観的チャンスと主観的チャンス

第48節 理解社会学における合理的行為類型の優先

第49節 社会科学における客観的意味と主観的意味

第50節 結び—今後の問題の指摘

世界に内属する営為としての社会科学

- 生世界概念の導入による論理構成の変化
→生の一様態としての科学の解明へ
 - 日常的レリヴァンスと科学的レリヴァンス
 - 「『レリヴァンス』という概念は、経験、対象、主題が顕在的ないし潜在的に意味のあるものとして選択されることに関する問題を指す。これは、日常的行為と科学的研究の両方においてつねに問題となっていることである」 (Endreß 2006: 56)
 - 間主観性の2つの次元：科学者共同体の間主観性と日常世界の間主観性
 - 社会科学者にとって、日常世界で習得した知識は探究の前提となる（解釈学の用語でいえば先行理解の構造）
- 科学（Wissenschaft）の問題は知識（Wissen）の問題である

知識をめぐる諸問題

- 新しい知識の獲得はいかにしてなされるか？
- 知識の伝達はいかにしてなされるか？
- 知識のストックと知識の使用の関係は？
- 言語的知識と非言語的知識の違いは？
- 日常的知識と科学的知識の違いはどこにあるか？
- 社会学者の先行理解は社会学的探究においてどのような働きをするのか？
- etc.

→社会科学認識論 = 知識社会学の基礎的理論

知識社会学

- シュッツ(など)の著作に基づいて、社会の産物としての知識について研究
 - Berger and Luckmann (1966=2003)
 - Schütz und Luckmann (2003=2015)
 - Luckmann (2017)
 - Soeffner (1989)
 - Knoblauch (2020)
 - 日本の研究：那須 (2019)、河野 (2019)、小田 (2020) など
 - 主にドイツ語圏で展開 = Wissenssoziologie
- 科学知を人間の知識の一様態として位置づける

問いに対する答え

- 〔問い〕 シュッツ現象学はいかなる意味で「社会学理論」なのか？
- 〔答え〕
 1. 社会の根源に関する理論 = 基層理論として
 2. 社会科学的認識の前提構造に関する理論 = 社会科学認識論として
 - 2'. 知識社会学の基礎的理論として
- 社会学理論は、科学知の産出を可能にする道具であるだけでなく、科学知の産出の構造と意味を反省的に考えるための道具でもある

文献

- Abend, Gabriel, 2008, "The Meaning of 'Theory,'" *Sociological Theory*, 26(2): 173-99.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor Books. (山口節郎訳, 2003, 『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社.)
- Endreß, Martin, 2006, *Alfred Schütz*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- 橋本努, 1995, 「A. シュッツの方法論に関する批判的考察——オーストリア学派との関係から」『社会学評論』46(2): 144-57.
- 河野憲一, 2012, 「テーマ別研究動向(現象学的社会学)——現象学的社会学の展開可能性」『社会学評論』62(4): 571-83.
- ———, 2019, 「知の社会学と現象学的社会理論」栗原亘・関水徹平・大黒屋貴稔編『知の社会学の可能性』学文社, 9-32.
- 木村正人, 2018, 「共同行為と期待の循環——草創期ドイツ社会学における現象学の位置」『現象学年報』34: 15-25.
- Knoblauch, Hubert, 2020, *The Communicative Construction of Reality*, London & New York: Routledge.
- Luckmann, Thomas, 1983, *Life-world and Social Realities*, London: Heinemann Educational Books. (デイヴィッド・リード/星川啓慈/山中弘訳, 1989, 『現象学と宗教社会学——続・見えない宗教』ヨルダン社.)
- ———, 2017, *Wissen und Gesellschaft: Ausgewählte Aufsätze 1981-2002*, H. Knoblauch, J. Raab und B. Schnettler (Hg.), Köln, Herbert von Halem Verlag.
- 那須壽, 2019, 「A・シュッツと知の社会学——知の社会学の新たな展開のために」栗原亘・関水徹平・大黒屋貴稔編『知の社会学の可能性』学文社, 307-42.
- 西原和久, 2010, 『間主観性の社会学理論——国家を超える社会の可能性 [1]』新泉社.

文献

- 小田和正, 2020, 「ホーリズムとしての知識社会学——知識社会学の根本問題の解決に向けて」『現代社会学理論研究』14: 83-95.
- Schütz, Alfred, 1932, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie*, Wien: Verlag von Julius Springer. (佐藤嘉一訳, 2006, 『社会的世界の意味構成——理解社会学入門(改訳版)』木鐸社.)
- Schutz, Alfred, 1996, "Social Science and the Social World," *Collected Papers IV*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers, 140-6.
- Schutz, Alfred and Talcott Parsons, 1978, *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Bloomington and London: Indiana University Press. (佐藤嘉一訳, 2009, 『社会的行為の理論論争——A・シュッツ=T・パーソンズ往復書簡〔改訳版〕』木鐸社.)
- Schütz, Alfred und Thomas Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK. (那須壽監訳, 2015, 『生活世界の構造』筑摩書房〔部分訳〕.)
- Soeffner, Hans-Georg, 1989, "Alltagsverstand und Wissenschaft: Anmerkungen zu einem alltäglichen Mißverständnis von Wissenschaft," *Auslegung des Alltags - Der Alltag der Auslegung: Zur wissenssoziologischen Konzeption einer sozialwissenschaftlichen Hermeneutik*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 10-50.
- 高艸賢, 2020, 「アルフレート・シュッツの科学論——社会科学認識論における生と認識の問題」(東京大学大学院人文社会系研究科博士論文) .
- 山口節郎, 1981, 「『現象学的』社会学は現象学的か——シュッツの『三つの公準』をめぐる」『社会学評論』32(3): 36-53.